

(5) アンケート結果から見る子どもの読書活動の現状

～このような内容を「第 4 次計画書 本文」に掲載予定～

古賀市の子どもの読書活動の現状を把握するため、対象を、乳幼児、小中学生、高校生の 3 つのグループに分けて、アンケート調査を実施し、国が毎年実施している「全国学力・学習状況調査」の結果も活用しながら現状を分析しました。

【1. 乳幼児】

保護者が読み聞かせをしている割合が 9 割を超え、読み聞かせの頻度が週 1 回以上が 8 割近くを占めるなどから見ても、読み聞かせに対する保護者の関心の高さや熱心さがうかがえます。

その背景には、保育所や幼稚園をはじめ、地域文庫や読書ボランティアなどによる、読み聞かせや本を手に取りやすくする環境づくりのほか、家庭で親子が読書に親しめるような働きかけが、読書意欲を高めた結果であると思われます。

本の入手や選書にあたっては、書店やインターネットなどを活用する割合が 7 割を超え、市立図書館を利用しない保護者の割合は約 6 割にのぼります。

その理由としては、保護者が仕事や家事で忙しく、自身の空いた時間に好む本を気軽に楽しみたいと思いや、市立図書館では子どもが騒いだり、借りた本を汚損してしまうなどの心配もあって、「借りずに買う」という選択をする保護者が多いことも一因と思われます。

なお、ブックスタートやセカンドブックといった取組は、読み聞かせや読書のきっかけづくりでは、一定の評価を受けているようです。

本にふれる環境や機会が幼い頃から身近にあることが、その後の読書活動の充実や習慣の定着につながると考えられることから、今後も引き続き、保護者に読み聞かせの大切さやおすすめ本の情報等を届けることが必要です。

また、成長とともに、本にふれる環境や機会は幅広くなっていくことから、家庭・地域、保育所等施設、市立図書館等が相互に連携して、子どもたちの読書活動を支えていくことが重要と思われます。

【2. 小中学生】

国が実施した「全国学力・学習状況調査（平成 28 年度、令和元・3 年度）」によると、小学 6 年生、中学 3 年生ともに、読書が好きな割合は 7 割を超え、特に中学生は増加しており、福岡県及び全国平均を上回っています。

1 日に短時間でも読書をする習慣がついている割合は、小学生が 7 割、中学生が 6 割を超えていることから、読書に対する意識の高さがうかがえます。

また、図書館に行く割合も、福岡県及び全国平均よりも高く、ともに増加している状況です。

このことは、「朝の読書」や「読書ボランティアによる読み聞かせ」等の活動の推進、学校

図書館に専任の司書が配置され、「読書センター」及び「学習・情報センター」としての環境整備が整い、子どもたちにとって身近な存在になっていることを示す結果であると思われます。

一方で、読書をしない層は小中学校ともに約 3 割で増加傾向にあり、背景には、パソコンやスマートフォンなどの様々な情報メディアの発達・普及により子どもたちを取り巻く環境が変化したほか、家庭学習、習い事や部活動など読書以外に時間をさかざるを得ない状況となっていることが、学校図書館における年間貸出冊数の減少からもうかがえるところです。

更に、インターネットでの SNS やゲーム、動画視聴など、興味関心が他のところに向いており、読書のために時間を割かなくなる子どもはこれからもっと増えると思われます。

成長段階に応じて、読書に興味関心を引くような取組をさらに充実し、常に本との関わりを持たせ、読書をするきっかけづくりを続けていく必要があるとともに、限られた時間の中で量よりも質を考えた読書を進めて行くことが重要と思われます。

【3. 高校生】

読書が好きな割合は、5 年前と変わらず 8 割近くと高く、1 か月に 1 冊以上の本を読んだ高校生は 8 割を超え、また 5 割は月 1 回以上学校図書館に行くなど、読書や図書館を好意的にとらえていることがうかがえます。

これらは、「朝の全校一斉読書」の実施によって本を読む習慣が身につき、学校図書館では、委員会活動を基にした生徒の実態に応じた資料収集や環境整備が進められた成果によるものと思われます。

幼少期からの読書状況の変化として、小学校高学年まで読書量は増加するものの、その後、中学生・高校生では読む時間や本の量ともに減少していく傾向にあり、その理由としては、勉強や部活動等で忙しく、普段から本を読む習慣がなかったり、興味関心に合う本が身近にないことを理由として、本を読まなくなる事情が明らかになりました。

また、紙の本もある程度は読んでいるものの、傾向としては、スマートフォン等で気軽に読むことができる電子媒体に移行しつつある状況がうかがえますが、古賀市電子図書館の利用率は低く、電子媒体に親しんでいる一部の層しか利用者として取り込めていない課題が見えてきました。

読書を難しいものとしてとらえてしまいがちな傾向がうかがえるなか、幼少期・小中学生から楽しく本と出会う機会をつくり、自分の能力に合った読書を進めることで、読書習慣を身につけさせこと。さらには高校生が好む本などを手に取りやすくし、気軽に利用できるような環境を整えることが必要と思われます。

また、電子図書館についても、高校生を含む子どもたちを対象とした利用案内や資料の充実に力を入れていく必要があると思われます。